核廃絶へ連帯を

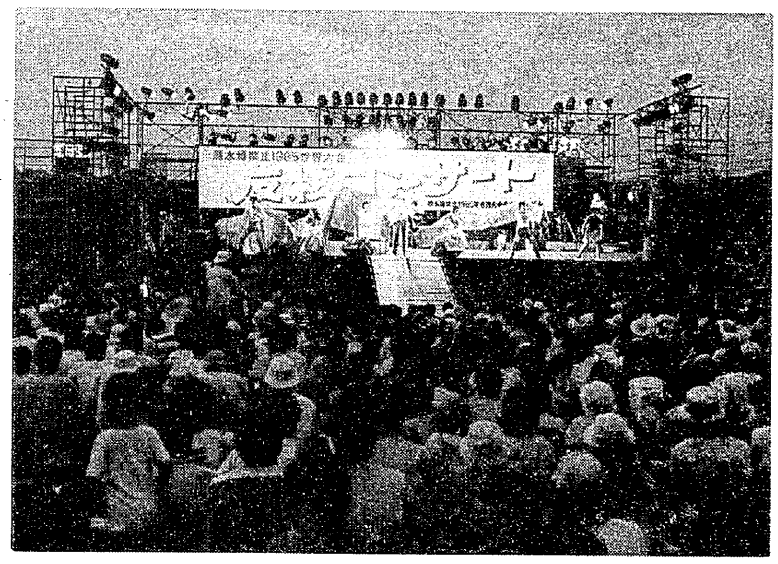
反核から非核社会創造へ
―原水禁長崎大会に参加して―

今年は、アメリカが広島と長崎に原爆を投下し、多くの市民を殺傷してから四十年の節目にあたります。

同時に、日本軍国主義が無暴な侵略戦争を続けるなかで原爆投下を招き、ついに終戦となってから四十年目にもあたります。被爆から四十周年を迎えた今も、被爆者や戦争の犠牲者は切り捨てられ、苦しみから解放されていません。

原水爆禁止一九八五年世界大会は、広島で国際会議が開かれ、ヒロシマ・ナガサキ被爆四十周年にあたり世界の人びとに呼びかける〝広告〟や非核熊本県宣言の三十六万人の署名活動と県議会提出の経験報告、沖縄の非核宣言六十万人運動と〝戦場の子供〟の一フィート買い取り運動、長崎の平和コンサートや非核自治体宣言、京都の反原発監査請求運動、東京の第五福竜丸保存運動、その他、各地の被爆者の語り部運動、平和行進、非核宣言の取り組みなどが報告されました。

(組織部長 芳川 勝・記)



〝反核コンサートのひろば〟で

集会が開かれた平和公園祈念像の前で

アピールが採択されました。

長崎大会は、十二会場でフォーラムが取り組まれ、三池労組からの代表は〝反核・平和、草の根運動を前進させるために〟の会場に参加しました。

この会場では、原水禁、原水協などの平和団体をはじめ生協連、地婦連、宗教団体などから一年間の運動が報告されました。

熊本原水禁の〝憲法を守る意見広告〟や非核熊本県宣言の三十六万人の署名活動と県議会提出の経験報告、沖縄の非核宣言六十万人運動と〝戦場の子供〟の一フィート買い取り運動、長崎の平和コンサートや非核自治体宣言、京都の反原発監査請求運動、東京の第五福竜丸保存運動、その他、各地の被爆者の語り部運動、平和行進、非核宣言の取り組みなどが報告されました。

(組織部長 芳川 勝・記)

三池炭鉱の歴史の中から

強制連行収容所跡案内

その四 第十四回

武松輝男

ガラスが破れた窓からのぞく室内は陰く荒れている。手入れのとどかない荒れた土地を荒無というがそういう荒れかたであった。人びとが住まなくなった家は陽がなくなって陰だけがその存在を張りつめている。

窓のガラスは誰が砕いたのか、破片が散らばっている。踏むと鋭い音を立てる。その音は、あるいは人が住まなくなった陽と陰の狭間で耐えることができなくなった物体の、それを捨てた者への怨み言かも知れない。

「ここが収容所跡ですか」

室内はカビの匂いに満ちている。長い間、人びとの暮しの中でしみ込んだ汗と脂が、かつての住人のありかを漂わしている。

「どういう生活だったんでしょうかねえ」

訪ねてきた朝鮮人・韓国人の二世と三世は問いかける。

粗末な食事、粗末なだけならまだいい。強制連行される前の自由に選択できた食事と違って、意に添うもの添わないものが混ぜ合わされて与えられたのだから、与えられた者は苦痛である。

ホームシックは食事からはじまるとさえ言われている。

朝鮮食を粗末な食事と勘違いしていた指導者の誤ちが悲劇の一面を形づくったのではないか。キムチにしたって同じこと、白菜を胡椒と塩で漬けたものと思っている。胡椒味が強いと本物だと合点顔する。本物のキムチは魚肉、獣肉、果実など多いものは五十種にもおよぶ「そえ物」を入れている。たん白質も脂肪質も補給できるようになっている。日本人が好む淡白な胡椒のきいた白菜漬とは本質的に異っている。

「どんな食事だったんでしょうねえ」

誰も質問に答えられない。

消化不良で排泄したやわらかい汚物の中から、消化しきれないでいるトウモロコシを拾い出して、それを水洗いし、再び口に入れて飢をしのいでいたということを、いったい誰が言えるだろう。

しかし不思議なことに、朽ちかけた家屋を目の前にしていると、そういう苦痛に満ちたかつての生活が、廃墟いっぱいに拡がって映し出されてくる。もしこれが塵ひとつない磨かれた畳、真っ白い壁、糊のきいたフスマの前で、たとえ口を酢っぱくして語ったにしても現実との抜き差しならない落差だけがきわだってくるだろう。

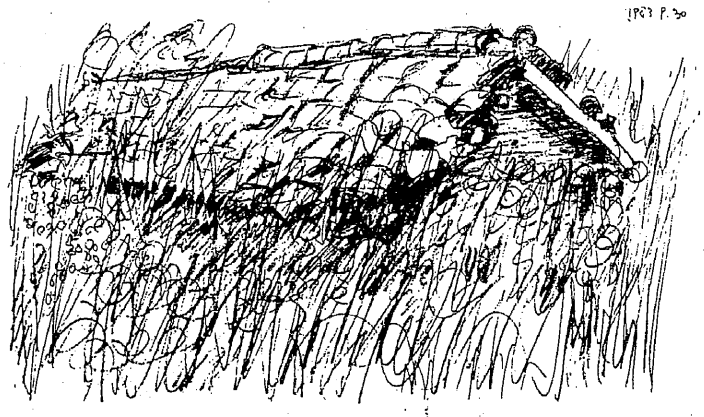
収容所を訪れた朝鮮人・韓国人の二世、三世たちが訴えている「指紋押捺制度をなくす」運動の高まりは、戦後四十年目の飽食のかげりが時空の落差を縮めた。

また、「アジアの中の日本、日本の中のアジア」を主題に、「囚われびと」の苦渋を学ぶ九州キリスト教青年キャンプの若者たちが収容所跡を訪れたのも、機械文明がもたらしたかげりからか。

だが、指紋押捺制度が示しているように、囚われびとの規範は時空の外側にあったのではないか。かつて、皇国臣民などと綺麗ごとでいいあらわされ、勤労報国隊といって呼ばれたこともあったが、いま考えると、それも「囚われびと」であることを糊塗するための裏がえしの表現ではなかったか。

いま、これらの人間としての痛みをよみがえらしてくれる収容所が、取りこわされている。強制連行中国人収容所は全くない。朝鮮人収容所がいくつか残っている。人間の痛みの歴史の証しとして、残させる手だてはないものかと、訪れるたびに眺りが深まっている。

(カットも筆者)



強制労働の犠牲者しのび

死没囚人労働者 法要営む

大牟田囚人墓地保存会(浦川守 西乗住職)で第十七回目の死没囚人労働者の法要を営みました。この代表は、八月十日午前十時から大牟田市久保田町の運心寺(運池の日、およそ六十人の人びとが供養のために集まり、過酷な強制労働の犠牲となった三池炭鉱での囚人労働をしのびながら、霊をなぐさめました。法要は僧侶の読経のあと全員が焼香、浦川代表が謝辞を述べ、法要のあと懇談会がもたれました。

「保存会」は囚人墓地をはじめ三池炭鉱での囚人労働の歴史を語り伝える史跡などを保存する運動を続けています。

「CO患者・遺族を守る会」会費改訂のお訴え

三池大災害は、三池闘争が終結したあと、自民党政府の石炭ぶっつぶしの石炭政策強行のなかで、三井鉱山が組合無視、保安サボ、生産第一主義による徹底した合理化を進めた結果起こった、まさに犯罪的労働災害でした。

この大災害によって、一家の主柱を奪われた遺族と一酸化中毒症を烙印されたCO患者とその家族の苦難ははかり知れないものであり、それは現在も続いています。

災害を起こした三井鉱山は、責任さえも認めようとせず、補償についてもやむなく結んだ協定を三年毎に改訂していますが、きわめて不十分なものであり、CO特別立法も救済には程遠いものでした。

こうした事態のなかで、損害賠償請求の裁判を起こし「責任追及」「生活補償」「完全治療」などの要求とともに、ふたたび災害を起こさないこと、現行労災法を抜本的に改正することをめざしてたたかっています。

このたたかいを支える運動として、昭和四十三年秋から「CO患者・遺族を守る会」を結成しこんにちにおよんでいますが、生命を守るたたかいと全国の労災・職業病・公害のたたかいとの連帯・発展はとくに重要な課題となっています。

「三池のCO患者・遺族を守る会」(通称「CO守る会」)は、会費半年分=千二百円、一年分=二千四百円で、会員には三池労組機関紙『みいけ』を月二回配布していますが、会費につきましては九年前に値上げしたままで、この間の諸費値上がりなどによって機関紙購読料と郵送料実費にも充たない実情です。内部努力で経費節減につとめてきましたが、今後の運動の発展をはかる立場から次のように改訂させていただくことになりました。

会費 一カ月分=三百円、半年分=千八百円、一年分=三千六百円。(十月分納入時から)

裁判提訴から十二年。いよいよ終盤を迎えていますが、裁判所からの和解提起によって三池労組と原告団は和解のテーブルにつくことを決定しましたが、これに反対して一部の原告が分裂した原告団を組織し、またこれを支援する動きとともに別の組織を作って集会やカンパ活動など進めていますが、これらの動きは組織原則を逸脱したもので、私たちの「守る会」とは無縁のものです。裁判闘争を全体的な立場から確実に勝利するために、主旨をご理解いただき、いっそうのご協力ご支援をお訴えいたします。

CO患者・遺族を守る会
三池炭鉱労働組合